



TITLE:

<大會抄録>鄭の始封・東遷をめぐって

AUTHOR(S):

松井, 嘉徳

CITATION:

松井, 嘉徳. <大會抄録>鄭の始封・東遷をめぐって. 東洋史研究 1986, 45(3): 591-591

ISSUE DATE:

1986-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154163>

RIGHT:

大會抄錄

鄭の始封・東遷をめぐって

松井嘉徳

周厲王の子、宣王の母弟（庶弟）桓公友は、宣王三二（前八〇六）年に鄭に「封」ぜられ、三十三年後に幽王により司徒に任ぜられた。時に王室は褒姒の爲に亂れ、「東徙」を謀った桓公は虢・鄭より十邑を獻ぜられ、その地に「國」した。桓公自身は幽王一（前七七）年に幽王とともに犬戎に敗死するが、その子武公掘突（滑突）が即位し、平王の東遷に際して重要な役割を果たした。

『史記』の傳える鄭の始封・東遷の事情は以上の如くである。その眞偽をめぐる論争は以後絶えることなく繰り返されるが、その論點は『左傳』『國語』『史記』『竹書紀年』等々の諸史料のうち、いずれの記述を重視するかという一點に還元しうるものであり、現在もおその結論を見出せないという事實そのものが、この論争の方法上の限界を示している。

本報告では、從來の論争とは視點をかえ、『史記』の内容引用中に傍線を附した「封」と司徒との關係の分析からこの問題を考えてみたい。司徒（嗣土）の官名は西周金文にも見え、王朝の執政にあたる地位の官であり、更に『左傳』に據れば桓公に次ぐ武公・莊公も王朝の卿士であつたとされる。「王官」としての傳承を持つ鄭が「封建」諸侯として扱われるこの斷絶に、鄭の始封・東遷をめぐる

論争の眞の發端があると考えられるのである。またこの分析を通して、西周期から東周期への變化の一端を窺うこともできるのである。

吳・南唐政權の性格

——その地域支配を中心として——

伊藤宏明

唐宋五代期における江淮の政治・社會狀況を明かにする上で、吳・南唐王朝に關する研究は缺くことのできないものである。以前よりさまざまな分野の研究がなされてきている。

とくに政治史の分野では、吳から南唐への政治的な展開を、武人層による藩鎮的な軍事支配體制を克服して文治主義的な集權官僚體制を確立していく過程として從來から理解されてきたように思う。こうした見通しのもとに、本發表では、とくに吳・南唐政權による地域支配の問題を取り上げてみたい。というのは、兩政權下における地域支配の分析をすることが、吳・南唐國家のもつ公共的な性格を考える上で重要な視角になると思うからである。ここである地域支配とは州縣段階の支配を示す。

唐宋、黃巢の亂などによって荒廢した江淮社會を如何に再建しようとしたのか、あるいは江淮社會がかかえもっている流民、少數民族問題などさまざまな矛盾を如何に克服しようとしたのか、またそこに住む民衆の意思を如何に地域支配の中に反映させようとしたのか